「イメージの形成と言語発生のモデル」から「文学のモデル」へ

岩垣 守彦
玉川大学 文学部英米文学科

人間は，霊長類の仲間であるサルや類人猿と同じように，この世に生まれてきた瞬間から，非常に視覚的な動物で，人間の認知は視覚に支配されている．眼は視神経を通して，一秒当たり何百万という信号を脳の視覚路に送り込んでいる．

脳を情報処理システムととらえるコスリン(Stephen M. Kosslyn) , フィンケ(R.A. Finke) の視知覚とイメージのモデル（守一雄『認知心理学』（1995，岩波書店）pp.66-81 および，久保正敏著『マルチメディア時代の起点 — イメージからみるメディア』（ＮＨＫブックス） p.22/p.41）を利用する．

コスリン，フィンケの視知覚とイメージのモデルのいいところは、視知覚と心的イメージが同一の脳スクリーン（視覚バッファ）に現れるというアイディアである．また，心的イメージは，視知覚の集積データの再現（＝記憶イメージ*）および再構成・再統合（＝想像イメージ*）というアイディアも面白い．というのは，ものを認識するということは感覚器官を介在させるので，私たちは，実際に見たものと全く同一のものを見ているわけではないからである．（これは，後に，「文学」におけるリアリズム(realism)，「事実(facts) とその表象(fiction)」との関係に関わってくる．）

● 【イメージの形成】

お腹をすかせた子猫は，親猫がいないと「ミヤーオ」と鳴きながら，親を捜します．
白い皿にミルクを流し込んで与えるとなめます．
次には，白い皿を見ると，ミルクをなめて，空腹を満たします．
ある日，ミルクを入れない白い皿をだします．子猫は駆け寄りますがミルクが入っていません．子猫は「ミヤーオ」と鳴きます．
皿は白くても，ミルクがない場合もあるのだと子猫は知ります．
次に白い皿を見たとき，子猫は「ニヤー」と鳴きます．あると黙ってミルクをなめます．ないと「ミヤーオ」と鳴きます．

【参考】——
「子猫の声」はソナグラム（周波数分析器）で分析・図示すること．
——

ここに示したプロセスを「イメージ形成モデル」に当てはめてみる．

お腹を空かせた子猫は，親猫がいないと，「ミヤーオ」（不足リズム）と鳴きながら親を捜します．
白い皿にミルクを流し込んで与えます．
↓
外界の物理的な対象物がある [ミルク入り白い皿がある]
↓
目を向けて見る（明暗のパターン）[ミルク入り白い皿に目を向けて見る]
↓
網膜で情報処理をする
↓
検出（明るさ・形状・その他の特徴）[ミルク入り白い皿を検出する]
↓
脳スクリーンに「検体「ミルク入り白い皿」のイメージが現われる [視知覚] [ミルク入り白い皿イメージ]
↓
↓←想像力（集積データにアクセスする）

↓
脳スクリーンに集積データから同一・類似のパターンを映し出す［ミルク入り白い皿イメージ］
↓
照合・識別（類比・集合して［ミルク入り白い皿のイメージを重ねる］→（認識する）
↓
子猫はミルクをなめる.
↓
集積・記憶される（照合の度数も含めて個別的・全体的に集積する）

何回かこれを繰り返すと，「ミルク入の白い皿」はセットになってイメージされる．したがって，白い皿を見ると，ミルクをなめて，空腹が満たされる.

ある日，ミルクを入れない白い皿をだす．子猫は駆け寄るがミルクが入っていない．子猫は「ミヤーオ」［不足リズム］と鳴く.

皿は白くても，ミルクがない場合もあるのだと子猫は知る．子猫の脳の中で「ミルク入り白い皿」のイメージは分解されて，「白い皿」「空の白い皿」「ミルク入り白い皿」という三つのイメージが集積されると同時に，「白い皿」は形状・期待・疑念，「空の白い皿」は不満・失望，「ミルク入りの白い皿」は満足，などの情報も付加されて集積される.

したがって，次に白い皿を見たとき，子猫は「ニヤー？」（主観的疑問予測）鳴く．ある（客観的肯定現実）と鳴かない．ない（客観的否定現実）と「ミヤーオ」（不足リズム）と鳴く.

このように，人間も含めて動物は「充足状態」では「声」を出さない．「声」を出すのは「不足状態・不足懸念」の時である．（この段階の「声」には「意味」がない）

この「不足」「不足懸念」は，脳を持つ生命体の考えられる一次的動因として，遺伝子に組み込まれている．まず，生命体を維持するための一次的動因がある.

渇き（定期的に水を求める）→不足すると声を出す
空腹（定期的に食を求める）→不足すると声を出す
睡眠（気象・生命のリズム）→不足したり乱されると声を出す
である．なお，普通は，交尾（再生），母性（授乳・育児）も一次的動因に入れているが，言葉の発生の観点から考えると，

誕生（到来）
交尾（再生）
母性（授乳・育児）
死（出発）

と別の分類に入れた方がよい．これらの四つの項目は動物という生命体の宿命的な事象・経験として，遺伝子に組み込まれているものであるが，自然な環境では，充足されなくても「声」を必要としないからである.

【参考】――

James Thurber と E.B. white は「人間が性的衝動を本来的な形で表現するには，もう一人の人間が必要である」(The Language Instinct, p.278) と述べて，「性欲」に注目しているが，それは交尾期を限定しない人間にのみ言えることであると同時に，それは「言葉の発生」ではなく「コミュニケーションの発生」に必要な条件である.

【参考】――

遺伝子に関しては 乾・今井・山下訳『認知発達と生得性－心はどこから来るのか』共立出版株式会社（J. L. Elman et al: rethinking Innateness—A connectionist perspective on development, Massachusetts Institute of Technology）などを参照.

●「言葉」の発生

さて，子猫が「ミヤーオ」（不足のリズム・客観的否定現実）と鳴いたとき，白い皿にミルクを入れてやる．子猫は黙ってミルクをなめる．また同じ事態が生ずると，子猫は学習して，ミルクがないと「ミヤーオ」と鳴く．ミルクが来るので，猫は，ミルクがほしい時には「ミヤーオ」と鳴く．この結果，子猫の「ミヤーオ」は「ミルクがほしい」という「意味」を生ずる．

リズムそのものには「意味」はない．しかし，一次動因に対応する「声」に反応があると，それが「リズム」に「意味」を与えることになる．子猫が「ミヤーオ」と鳴いても，何の反応もなければ意味は生じない．しかし，「ミヤーオ」と鳴くと親猫が寄ってくるとわかると，次に空腹時には，子猫はまた「ミヤーオ」と鳴くのである．

動物は，一次的動因に対応する反応が生じても，「声」を「分節」することができなかったので，「文」は増えなかった．しかし，人間は「リズムパターン」を意識し，「リズムパターン」に「命名」をした．

人間の祖先にあたる霊長類は，複雑な音を生み出すのに必要な咽頭部の空間を持っていなかったが，人間は長い首を発達させ，喉頭の位置を下げることで，十分な空間を手に入れた．舌も丸くなって，「音声言語」の発達を助けた．やがて，「音の塊」（リズム）が自由に出せるようになる．

人間も，一次的動因が充足されている場合には，「声」を出さない．しかし，一次動因が充足されなくて現状に不満・不安があると「客観的否定現実」の情報を，将来に懸念があると「主観的懸念疑問」を，人間は「音声」を使って発した．

これを「言語」の面から見ると，「文」は「不足のリズムパターン」があり，「それに対する反応」から発生したものである．したがって，「リズム」がコミュニケーションの起源とすれば，「文」は右脳から始まったものである．

もし，左脳を使うとすれば，それはリズムを分析的にとらえ，「文」を「音の塊（単語）の組み合わせ」と意識して，形態素分析や構文分析をはじめた時である．

これは音楽家の脳を調べてわかってきている．

音楽家の脳を研究したところ，学習や経験によって，右脳と左脳の優位性が変化することがわかった．たとえば，音楽家でない人は，音楽を聴くとき，メロディーの流れ全体に注意を払い，おもに右脳を使う傾向がある．だが，音楽家はもっと分析的に聞くので，左脳を使って音楽を構成要素に分けて聞く．

脳が損傷されたとき音楽的な能力にどのような影響が出るかを見ると，二つの半球が特殊化していることがよくわかる．右脳に損傷がある場合には，歌唱能力が著しく損なわれ，メロディーの感覚がなくなるが，リズム感は損なわれない．一方，左脳に損傷があると，曲の名前を言ったり，楽譜を読んだりするときに問題が起きる．フランスの作曲家ラベル (1875-1937) も，左脳をおかされて，こうした症状が出た．

どんな言語も文法ルールによって制約されている．具体的に，どのように否定文を作るか，疑問文を作るか，は言語によってまちまちであるが，「疑問文を聞く，それに答える」というのは人類の言語に共通した現象である．それは，人間の脳の構造が共通しているからだ．たとえば，英語と最も文法構造が離れていると思われている日本語との間にも，「疑問文と返答」には共通な言語認識がある．たとえば，

What is this?　An apple.　(It's an apple. とは普通言わない．)
これは何あに？　リンゴよ.　(「それはリンゴよ」とは普通言わない)
cf. Who is your favorite composer? Beethoven. (He is Beethoven. とは言わない)

言葉は「単語」からではなく「文」から発生したのであって，それを支えるものが「普遍文法 (universal grammar)」である．しかも，その文法はきわめて単純で，まずは「〜がない（客観的否定現実）」と「〜はあるだろうか？（主観的疑問予測）」があって，それから「〜（のこと）は・・・（のこと）である（肯定平叙文）」が，疑問文・否定文の後から作られたものである．

【参考】――

スティブン・ピンカー (Steven Pinker) が『言語本能』(The Language Instinct) の中で書いていることを要約すると，次のようになる．

子供は，教えられたはずのないことまで知っている．チョムスキーが、言語の論理性を示す際に使った古典的な例を借りて，それを証明してみよう．その例とは語順を変えて疑問文を作る手順である．

A unicorn is in the garden.

a unicorn is in the garden. →

Is a unicorn in the garden?

では

A unicorn that is eating a flower is in the garden.

という文では，どうして最初の is をひっくりかえして疑問文にしないのか？答えは言語の基本的構造に由来する，とチョムスキーは指摘した．文は一見，単語を順に並べたものだが，私たちが持っている文法アルゴリズムは，「一番目の単語」，「二番目の単語」と頭から順にと単語を拾い出してはいかない．いくつかの句をさらに長い句にグループ分けして，それぞれのグループに「主語名詞句」「動詞句」などの名前をつけていく．疑問文を作る手順にしても，文を左から順に見ていって最初の助動詞をひろうのではなく，「主語」と名づけた句のあとにくる助動詞を探すのだ．

【参考資料】

言語学者の欠点として，「文構造」のみに視点が集中していて「情報」という点に考慮が足りない例.

そこで，副詞節についてもう少し議論を深めてみる．Greenbaum & Nelson(1996 “Positions of Adverbial Clauses in British English,” World Englishes, 15, pp69-81) は副詞節の文中における位置について ICE(International Corpus of English) を材料に調査し，副詞節の位置を決定する要因を探っている．まず調査結果を要約すると，次のようになる．

(4)

文頭	文中	文末
29.3%	1.8%	68.8%

副詞節の位置として 3 つの位置が可能だが，英語母語話者はすべてを均等に使っているわけではない．文末こそが副詞節の無標な位置であることが(4) から読みとれる．しかしさらに考慮しなければならないのが，副詞節が主節と結ぶ関係である． When 節は文末を好み (62.8%)，他方 if 節は文頭に起こることが多い (62.7%)．特に文頭の if 節については，条件・結果という意味的に自然な順序が他言語でも観察される普遍的な傾向であるという．・・・

斉藤俊雄・中村純作・赤野一郎著『英語コーパス言語学 — 基礎と実践 —』（1998，研究社出版， p.125）

［参考］

I went downtown yesterday. When I was walking along the street, I happened to meet Dr. Smith. I went downtown yesterday. I was walking along the street, when I met Dr. Smith.

そして，大切なことは，「肯定平叙文」は，言語の発生より後，人間が自分の存在に対して不満・不安・恐れを感じて，「物語」を生成し始めてから誕生したということである．言葉の機能で言えば「メタ機能」の発生や抽象概念の発生とかかわるのである．

●【共感感動の選択肢】

さて，大きな脳を持つ人間は，七つの動因

渇き（定期的に水を求める）→不足すると声を出す
空腹（定期的に食を求める）→不足すると声を出す
睡眠（気象・生命のリズム）→不足したり乱されると声を出す
誕生（到来）

交尾（再生）
母性（授乳・育児）
死（出発）

から，「不足－充足」「不安－安心」の感覚を，さらに，意識の底に，次のような「種の記憶」を「人類共通の原初イメージ」（集団無意識）として潜ませる．

細胞（→個の実感と孤絶感）
受精（→相反するものの合体感と充実の不安感）
成長（→移り変わる時間の実感・母性から離脱と父性への同化）
誕生（→到達・到来・母性から別離の不安感）
成人（→母性からの自立感と不安感）
豊穣（→再生の衝動）
葬送（→出発・別離の不安感と父性の未知なる世界への期待感）

これらが「原初イメージ」として共感の基盤になっていることは，世界中の民話・神話などを分類・分析するとわかる．これら七つをコア (core) に，さまざまな民族に見られる「文化イメージ」を加えて物語は作られるのである．そして，これらの「共感感動の基盤」を「言葉」でどういう形で含ませるかが「文学」である．

【参考】――

C. S. Lewis: An Experiment in Criticism (1961, Cambridge University Press, pp. 40-44) の中で，「神話」を初めて聞いたときにも不可避なものとして感じられる話として出している．

――

●「物語」の原型モデル（その１）

世界各地の神話やメルヘンやお伽噺には，同じような筋やイメージをもつものが驚くほどたくさんある．上に述べた「原初イメージ」は，「民話・神話・伝説」などの中に，様々な形で含まれている．たとえば、最も原型的な物語の構図を示そう．

太陽（天）
＋
人間の娘（地）
↓
男の子（天地の結合＝相反するものの結合）
↓
男の子は父を求めて旅に出る（母性からの離脱→父性＝未知なる世界の探求）
↓
父の息子としての試練（→男としての資格＝父親の承認）
↓
母のもとにもどる（→母性＝既知なる安逸の世界）

この構造・その一部を含む民話・伝説・文学作品は，世界中いたるところにある．有名な「行って帰る」構造の童話は，この構造（の一部）を利用したものである．たとえば，『どろんこ子ぶた』『どろんこハリー』『アナンシと６匹のむすこたち』『ロージーのお散歩』など．また，「ジャックと豆の木」や「桃太郎」もその類例である．

●「文学」を作るための実験モデル

［問題］(1) の原型モデルの一部または全部を使って，(2) の感動基盤を含む状況を作り，物語を創作せよ．（なお，名詞や代名詞と動詞を使い，形容詞・副詞はできるだけ使わないように心がけること）

【参考】

William Strunk Jr. and E. B. White: The Element of Style (1979, Macmillan Publishing Co., Inc.)

---

(1) 原型モデル（その１）

（男・雄　　）
＋
（女・雌　　）
↓
（相反するものの結合例　　）

（父を求める ＝ 未知なる世界　　）
↓
（→試練 ＝ 男としての資格 ＝ 父親の承認　　）
↓
（帰還 ＝ 母の許へ ＝ 既知なる安逸の世界　　）

(2) 共感感動基盤の選択肢

細胞（→個の実感と孤絶感）
受精（→相反するものの合体感と充実の不安感）
成長（→移り変わる時間の実感・母性から離脱と父性の探求・同化）
誕生（→到達・到来・母性から別離の不安感）
成人（→母性からの自立感と不安感）
豊穣（→再生の衝動・充実感）
葬送（→出発・別離の不安感と父性の未知なる世界への期待感）

(3) 文化イメージ

「父・母・子」などの関係.

どれだけ感動的な物語が出来るかは，センスと選択肢の組み合わせ・総合力によって決まる.

(4) 実際の作品の中から

『太陽へ飛ぶ矢』（アメリカインディアンの民話）
『太陽の子供たち』（南アメリカ・ギアナの民話）
『ヘンゼルとグレーテル』（グリム童話）
『かいじゅうたちのいるところ』（モーリス・センダック・創作絵本）
『オシリスとイシス』（エジプト神話）
『オルフェウス』（ギリシャ神話）
『オエディポス』（ギリシャ神話）

（朝日新聞１９９９年１１月１０日夕刊）
ＴＶチャンネル・久田 恵 — 角筈にて – 年月をかけて知る 父の悲しみ 人性

四日の夜の「角筈にて」（テレビ東京系）．浅田次郎の短編小説を，松原敏春の脚色でドラマ化した，胸に染みるいい作品だった.

主人公は，幼い頃，父親に東京，新宿の角筈のバス停前で置き去りにされ親戚の元で育つ．別れの時，父親に「サラリーマンになれ」と言われ，この行方知れずの父の期待に沿うべく，一生懸命に勉強し一流商社に入り，出世競争を闘うも社内派閥抗争に巻き込まれ左遷の憂き目に遭う，という背景を持つ中年男である.

幼い頃から兄妹のようにして育った優しい妻がいて，良き友がいて，部下たちに人柄を慕われて，子どもを持たないが幸せな男．でも「親に捨てられた」という「淋しい記憶」を抱えていて，その悲しみが，常に心に降ってくる，そんな難しい役を西田敏行が，なんともうまく演じていた．

この作品は，いわば「不在の父」と息子の物語なのだけれど，子どもにとって「親」とは何だろうと，考えさせられてしまう．

最後の場面で，主人公が，父の幻影と出逢う．その幻影に向かって，彼はどれほど自分が，父の期待に沿って頑張ってきたか，子どものように訴える．

その場面がどうしても泣けてしかたなく，ああ，人はこのようにして，人生のどこかで，それでいいんだよ，お前はお前なりによく頑張った，と親からの「承認」と「慰め」を得なければおさまらないものなのか，それを抜けて，やっと自分の人生なのかな，と思われた．

さらに，この主人公は，自ら人生に挫折して初めて，「子を捨てざるを得なかった父のなまなかではなかった人生の悲しみ」を理解し，父に「慰め」を返す．たぶん，それが人が最終的に大人になる，ということなのだろう．

それにしても，生きることは淋しい，人生とは誰にとっても困難なものなのだ，という地平に人が立つまでに，物凄い年月がかかる．

人性の半ばを過ぎ，残された時間が見えてきてやっと，だ．そう思うと，子どもに親の気持ちを分かって欲しいなどと願うことはおろかしいことのような気がする．

そう言えば，８３歳の父が，最近よく口にする．

「あの時，オヤジは・・・，ああ，そん時は分からんかったなあ」と．

80歳を過ぎてやっと，と思うと，私はいつもなんだか目眩がしそうになるのである．

（ノンフィクション作家）